



魔力が無いと言われたので独学で 最強無双の大賢者^に

He was told that he had no magical power, so he learned by himself and became the strongest sage!

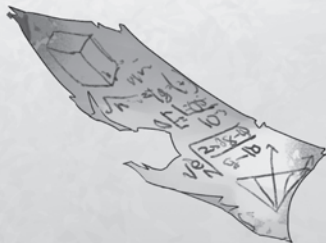
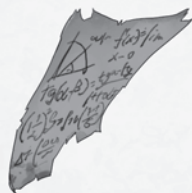
になりました!

Yukihana Keita

雪華慧太

Illustration

ダイエクスト



ゼギウス

ルオの父にして宰相。
アルディエント
最強の存在で、
ある野心を秘めている。

エミリア

大国アルディエントの王女。
ルオの元婚約者で、
国の在り方に疑問を抱く。

レオニード

エミリアの
現在の婚約者。
士官学校の新入生の中で、
トップ入学を
目されている男。

ジュリアス

ルオの異母兄で、
士官学校最強の生徒。
その力は国の
英雄すら凌ぐ。

フレア

勝気な
上級騎士爵家の娘。
ルオの強大な力と
野望を知り、
共に下克上を狙う。

ルオ

元数学者の転生者。
魔力が計測されず
公爵家から追放された。
名をジークと偽り、
未知の力で成り上がる。

主な登場人物

Main Characters

1、プロローグ

宇宙の真理を解き明かすもの、それが数学だと信じてきた。

でも、おかしいものだ。実際は宇宙の真理どころか、自分の運命さえ予測が出来なかったんだから。

もちろん俺は神じゃない。そんなことは当たり前の話なんだが、こうやって死にかけているとそれを実感する。

それにしても、まさか僅か二十九歳で死ぬとは思ってもみなかった。

最近提出した論文が認められて、数学者としてようやく人生をスタートしたばかりだっていうのに。

「先輩！ 裕哉先輩!!」

同じ大学に勤める後輩の詩織が、俺に叫んでいるのが聞こえる。

大学生の頃からの友人で、今日は一緒に昼食をとる約束だったんだ。

そんなに泣くなって……

馴染みの店に行く道を歩いていたら、車が突然歩道に突っ込んできた。

数学しか取り柄が無い俺が、漫画に出てくるようなスーパーヒーローになれるわけもないのに、俺は彼女を庇おうとして車にはねられた。

理屈じゃない。勝手に身体が動いたんだ。

俺が夢中で数学の話をして、詩織は笑って聞いてくれた。

ただの先輩後輩、ずっとそう思っていたのに。いつの間にかその笑顔が好きになっていた。

人生は数学では解き明かせないことばかりだ。

後悔はしていない。

……いや、少ししてるかな。

勇気を出して、彼女に告白を試してみれば良かった。

もう一度人生があるとしたら、今度は悔いの無い人生を送ろう。

俺の手を握って涙を流す詩織のことを眺めながら、そう思った。

それが俺の一度目の人生での最後の記憶だ。そして……



「ルオ、貴様のような無能者は我がファルデーア公爵家の人間ではない。今日限りお前はこの家とは関係の無い人間だ」

二度目の人生で、俺は五歳の時に父親からそう宣告された。

強い魔力を持つ者は将来が約束される世界、エファアーシア。

俺が生まれたのは、大国アルディエントの王家の血を引く名門貴族、ファルデーア公爵家。

その家の長男、ルオとして俺は二度目の生を歩み始めた。

誰もがうらやむ身分だ。

前世の記憶が、どうして残っているのかは分からない。

だが、俺はこの世界で僅か五歳の時に、無情にも父親に見捨てられた。

「第五等魔法格など、我が公爵家にはあつてはならぬ魔法格。誉れ高いファルデーア家の跡取りにすることなど到底出来ん！」

「お、お父様……」

俺は思わず黙り込んだ。

この国では、五歳になると魔法格試験を必ず受けなければならない。それまではまだ才能の揺らぎの可能性があるそうだが、五歳になれば大抵の場合、その人間の魔法の才能を測ることが出来る。その階級は魔法格と呼ばれ、第一等から第五等まで厳しく序列がつけられている。

第一等魔法格の人間の将来は約束されている。中でも最上位に位置する者は、英雄クラスの力の持ち主だ。

もしも英雄クラスの力を持っていれば、平民であっても貴族に取り立てられることすらある。英雄クラスの力は無くても、第一等魔法格ともなればエリート人生は保証されている。

第二等魔法格ならば国軍の士官である上級騎士や魔導士、もしくは上級の役人に取り立てられる

者が多い。

第三等魔法格は中流階級。

第四等魔法格は過酷な労働に従事する者が多い。

そして俺が判定された第五等魔法格、これは普通ならあり得ない魔法格だ。この世界でも、今までに数人しか判定を受けたことが無い。

俺からは魔力そのものが全く測定されなかったのだ。

魔法、魔術、魔導……呼び方は様々だが、その類のものを使えないということである。

「魔力が無い者などゴミクズに等しい。お前の顔はもう見たくない、二度と私の前に現れるな」俺の父親は第一等魔法格、その中でも最上位に位置する力を持つ、王国の英雄の一人だ。

それだけでなくとも親族の多くが第一等の魔法格を持つ、公爵家。俺の存在自体がこの家の恥なのだ。母は父の傍で泣いている。俺はその時、気が付いた。

母はずっと父に嘘をついていたに違いない。正直俺も驚いた、自分には魔力があると思っていたからだ。

魔法格試験の前にも、この家で魔力を測定したことがある。その時は、確かに魔力があったのだから。

きっと、母と数名の侍女たちが、魔力の測定器に細工したのだ。

ギリギリまで必死の思いで隠してきたのだろう、最近の母は日増しにふさぎ込むようになっていた。

「貴方！ 悪いのは私です！ この子は何も知らなかったの!! どうか罰を与えるのなら私に……お願いです」

「黙れ、オリヴィア！ 隠していたのが問題なのではない！ このような出来損ないの「ゴミ」が、我が公爵家に生まれたということ自体が問題なのだ!!」

「……」

思えば母は、俺が魔法の勉強をすることを許さなかった。

「貴方はまだ子供なのよ、魔法なんてまだ早いわ」と言っ

目を伏せている侍女たちの姿を見て、俺はその理由もこれにあったのだとようやく気が付いた。

「ルオ……ルオ、私の可愛い坊や」

まるでうわごとのようにそう言っ

て「出ていけ、お前はもう公爵家の人間ではない」

冷徹に俺にそう言い放つ父。息子ではなく、虫けらを見るようなその目。

いや虫ですらない、「ゴミクズを眺めるようなその眼差

し。身体が震えた。

父の言うことは絶対だ、逆らうことなど許されない。

この家を出れば、二度とまともに口を利ける相手ではなくなる。

住む世界が違う人間になるのだ。魔法格が決めた最上級階層と最下級階層の人間として。

「分かりました、お父様。どうかお母様を責めないでください、悪いのは魔力も持たずに生まれて

きた僕なのですから」

それは、この家で俺が最後に言えた精一杯の強がりだった。前世の記憶がなければ、僅か五歳でこんなことを言われて精神がどうにかなっていたかもしれない。

涙を流して意識を失っている母。己の名誉の為に俺を見捨てた男の冷酷な顔。拳を握りしめる。悔しさと悲しさと、そして沸き上がるような怒りと憎しみ。

俺は一生忘れることが出来ないだろう。

自分の中から温かい何かが消えていく感覚。

言い知れぬ喪失感^{そうしつかん}が、俺の中の何かを変えていくのを感じる。

この日、俺は公爵家を追い出され、遠い分家であるトレルファス家に養子に出された。

それから十年。

月日が経つのは早いもので、俺は十五歳になっていた。

俺が養子に出された先のトレルファス家は、上級騎士爵の家柄。

ファルーディア公爵家とは遠縁^{とんえん}の親戚^{きんせき}ではあるが、その関係は親戚というよりは臣下^{しんか}と言った方が正確だろう。

初めの三年はまるで針のむしろだった。

トレルファス家に俺が預けられたのは恩情^{おんじやうかん}ではない。外間^{がいけん}を恐れ殺すことまでは出来ない邪魔者、

存在自体が恥である俺を生涯^{しやがい}閉じ込め監視する家。その役割を与えられたのが、トレルファス家なのだから。

俺を見る者たちの目には、憐れみ^{あわれ}と嘲り^{あざわら}、それらが入り混じった感情が浮かんでいる。

トレルファス家の人間たちも、僅かながらではあるが公爵家の血を引いているだけはある、魔法格は一等には及ばないが二等の人間ばかりだ。

本家の血筋でありながら、第五等魔法格を持つ俺への嘲り。それは口に出されずとも分かった。三年が過ぎる頃にはそんな扱いにも慣れた。

トレルファス家の離れの一室を与えられた俺は、ただひたすら一つのことを没頭^{ぼつとう}していた。

『第五等魔法格に関する研究』

そう記された文献。

これだけではない、俺は第五等魔法格に関する資料を出来る限り集めた。

意味の無い研究に没頭させておけば問題も起こさないと思っただろう、資料を集める許可はおろした。

俺はひたすらにその資料を読み、魔力が無い異端^{いたん}、第五等魔法格についての研究を続けた。そこにしか救いが無かったからだ。

先程の文献にはある一つの仮説が書かれていた。

これを書いたのは、俺と同じ第五等魔法格の人間の一人『バーレン・テルフェニル』という人物だ。

魔力の無い苦しみを背負い、そして一生をその研究に捧げた男。
俺はその男が残した仮説の証明の為に、この十年を費やした。

数奇なものだ、俺は真理の探究の為に前世の記憶の中にある数学に頼った。

魔力が無いと言われた俺には、それしか頼るものがなかったからだ。数千冊にも上る俺のノートには、無数の数式が書かれている。

今や俺の部屋の壁全てにまで、数式がびっしりと並んでいた。

一度目の人生でも、ここまで真剣に数学に向き合ったことは無い。

それは真実を求める俺の心の叫びだ。

俺の部屋に入った使用人たちは、最初こそ不気味そうにそれを見ていたが、妄想に取りつかれた哀れな人間とでも思ったのか、暫くすると気にも留めなくなった。

俺はノートに『最後の数式』を書き終えると、静かにその本を閉じた。

そして、その日の夜、トレルファス家の当主に願い出た。

「アラン殿。俺は士官学校に通うことにしました、どうかご許可を」

夕食の時間、減多に口を開くことのない俺が言った言葉に、その場にいる皆は凍りついたようにこちらを見つめる。

この家の当主であるアラン・トレルファスも驚いたように俺を見ていた。

「それは……しかし我らは、ルオ様をお預かりしている身。公爵様がなんと仰られるか」

「それに士官学校へ入学出来るのは、第三等魔法格までと決められています」

アランの妻であるライザは、そんなことも知らないのかと嘲りの目を俺に向けた。

この家にとって俺は厄介者だ。大人しく、一生あの部屋に閉じこもっているとその視線が語っていた。

俺は答えた。

「ええ、知っています。ですが例外事項がある。入学試験の一つである実戦式戦闘術で優秀な成績を残した者、その人間は魔法格に関わらず入学を許可されるはず。その為に剣の腕も磨いてきました」

この十年、俺は剣の鍛錬を怠ら^{おそ}なかった。俺がいくら剣を修練しようと、所詮は魔力による肉体の活性化も出来ない能無しだと、周囲の者が陰で笑っていたのはもちろん知っていたが。

ライザが笑った。

「何を馬鹿なことを。第四等魔法格の人間も自信があれば挑めば良いとなってますが、それは建前です。今や実戦式戦闘術試験は、入学者の序列をつける為の場になっています。誰が最も優秀な新入生なのかを確かめる為の場所。第四等魔法格の人間に入り込む余地はありません。ましてや第五等魔法格などに……」

「ライザ、やめぬか！」

アランはライザを制止した。夕食の場の雰囲気が悪くなっていくのが分かる。

いや、俺がこの場にいること自体がそうさせているのだらう。この十年間ずっと。

「うるさいわね、夕食がまずくなるわ」

ライザの隣に座っている赤毛の少女が、そう口にすると勢い良く席を立った。

際立った美貌びぼうを持つ、プライドが高そうなその顔が俺を睨みつけている。トレルファス家の一人娘であるフレアだ。

この家で唯一、第一等魔法格を持つ存在。

「いい加減にしないさいよ！ あんたの為にどれだけ迷惑してるか分かってるの!? いいわ、そこまですうのなら私が相手になってあげる。私も実戦式戦闘術試験には参加する予定だもの。公爵の息子だからって特別扱いされると思ったら大間違いよ。魔力の無いあんたが、どれだけ惨めな存在か教えてあげるわ！」

「やめなさい、フレア」

アランは娘をたしなめるように言う。

「だってお父様！ こいつを預かったせいで、お父様がなんて言われているか知っているの？ 公爵家に逆らえない男、誰からも疎まれる厄介者を押し付けられた臆病者おくびょうものだって！」

ぴしやりと乾いた音が部屋に響いた。アランが娘の頬を打ったのだ。静まり返る食卓。怒りに染まるフレアの目が俺を射抜いている。

「私はあんたなんかに遠慮はしないわ！ お父様とは違うんだから!!」

俺は美しい顔を歪めてこちらを睨んでいる少女を見つめる。

そしてアランに言った。

「アラン殿、もし俺がご息女そくじよに勝ったら、士官学校への入学の後見人となって頂けますか？」

士官学校への入学には後見人が必要だ。

この家の養子になった以上、トレルファス家の当主に頼むのが筋だ。名目上に過ぎないが、今の俺の親なのだから。

アランは暫く考え込んでいたが、やがて頷いた。

「いいでしょう。そこまで仰るのなら、このアラン・トレルファス、騎士の名において誓いましょう。ですが、もし敗れた場合、このような下らぬことを言い出すのはこれきりにして頂きたい」

どう考えても俺には勝ち目が無い。賭けにすらならない話だ。

ライザも不快そうに俺を睨んでいる。

「馬鹿馬鹿しい。フレアはトレルファス家が待ち望んだ第一等魔法格の持ち主。この家の誇りです。いずれは我が家を騎士ではなく貴族階級にしてくれるはず」

その為に公爵家に貸しを作る。それが、トレルファス家が俺という厄介者を預かった理由だろう。魔法格において、フレアと俺には天と地ほどの差がある。娘の勝利を確信しているライザの瞳。

フレアは顎で外を差す。

「庭に出なさいよ。今のあんたの立場を、私が思い知らせてあげる」

そう言って席を立ち、庭へ向かう。俺はその後に続いた。

アランとライザも同様だ。

フレアは使用人に言いつけると、自分と俺用の剣を用意させる。

「使いなさい。魔法も使えないあんたが、素手で戦えるわけないんだから」

俺は頷くと、使用人から剣を受け取った。
ライザが呆れたように俺を見る。

「本当にやるつもりなのですか？ フレアは剣士としても一流。勝負などやる前から目に見えます」

「ええ。それよりもアラン殿、約束をお忘れなく」

アランは静かに頷いた。

「武人に二言は無い。そちらの方こそ約束を違えないで頂きたい」

「ご安心を。もし負ければ俺は一生、あの部屋で静かに暮らすと誓いましょう」

その言葉にライザは満足そうに笑う。

あちらにとってはいい条件だ。娘の出世の為のカードが、一生大人しくあそこで過ごしてくれれば言うことは無いだろう。

だが当人は違うようだ。

俺を睨みつけるフレアの眼差し。そこには、言いようのない怒りが込められている。

「私にはあんたなんて必要無い、私自身の力で全てを勝ち取るわ！」

俺を預かったことが自身の将来に光を与えるなど、プライドが許さないのでろう。こちらに向けられる怒りの原因はそれだ。

フレアの身体から膨大な魔力が湧き上がる。それはまさに、第一等魔法格の証。

フレアの肉体もそうだが、瞳も魔力で活性化しているのが分かる。

ルビーレッドの瞳が、光を帯びていた。

魔力による身体活性。それを得意とするのが魔導剣士だ。

目の前の少女は、その中でも超一流だと言っているだろう。

「行くわよ！ あんたに思い知らせてあげる、第一等魔法格を持つ人間の力を!!」

無造作に剣を構えた俺に向かってくるフレア。赤いオーラを帯びているのは、強烈な魔力で活性化されている証である。

彼女の最も得意とする炎属性の魔力の光だ。

俺は静かにそれを見つめていた。

すると、彼女の体が霞むように動く。真つすぐにこちらに向かってくる、その凄まじい速さ。

「どうしたの、身動きさえ取れないのかしら？」

俺に向かって突き出されるフレアの剣。

それが俺の首元に突きつけられれば、この勝負は終わりだ。

「これで終わりよ！ 身の程を知らない!!」

勝ち誇るフレアの瞳、そしてその見事な剣技。彼女の剣先は俺の首元に突きつけられる。

だが――

突きつけられたのは、既に彼女の剣をかわした俺の残像に過ぎない。
すぐにフレアの前から掻き消える。

「なっ!？」

あつさりと突きをかわした俺を見て、驚愕に見開かれていく少女の瞳。
「そ、そんな！　嘘よ!!」

それを捉える俺の瞳は、彼らから見れば黄金に輝いているはずだ。
俺は、フレアの全ての動きを完全に見極めていた。

「あり得ないわ……何なのこの力、魔力も無いくせに!!」

「魔力だよ、フレア。ただし、君が知らない法則に従った、ね」

それは普通の魔力ではない。劣等魔力と呼ばれる存在。

俺と同じ第五等魔法格とされたバーレン・テルフェニル。あの男が書いた本の最後にはこうつつられていた。

『私は感じるのだ、自らに眠る強大な魔力の存在を。呪わしい我が魔力、劣等魔力よ』

研究を重ね、己に眠る未曾有の力を感じるようになりながらも、とうとうそれを使いこなすことが出来なかった男。まるで呪詛にも似た、その魂の叫び。

重なり合う無数の波紋のように複雑なその力。生き物のように一見不規則に揺れ動くその波動。

俺はそれを正確に捉え、数式化する。

本来、人には操ることが出来ないそれを制御する術式。

バーレンは書き残していた。もしこの本を読み、劣等魔力を制御できる賢者が現れたのなら、その術式を『神言語』と名付けて欲しいと。

それはまさに、呪われし我らを救う神そのものだ。

俺には彼の気持ちがよく分かる。

「フレア、君では俺に勝てない。絶対にね」

魔力で活性化された魔眼を超える神眼とも呼ぶべきその目。そして全身に魔力が満ちて、黄金の光を帯びる俺の身体。フレアの一撃をかわした超人的な身体能力の秘密だ。

俺の右手を通じて、手にした剣に黄金の魔力が伝わっていく。

剣の表面に浮かび上がる魔法陣。フレアはそれを見て叫んだ。

「くっ！　この光、一体何なの!!」

「これは神言語術式。君が知らない魔導だ」

その魔法陣には、魔導言語と共に無数の数式が書き込まれている。

バーレンが残した複雑な魔導言語と、俺が十年かけて作り上げた幾多の数式を融合させたもの。
「私が知らない魔導ですって？　そんな……あんたなんか、そんな真似が出来るはずが無い!!」

「試してみるか？」

武器に魔力を通わせ、強化する武具活性術。

今、俺が使っている術式はそれに近い。ただし、より高度ではあるが。

「黙りなさい！　落ちこぼれの第五等魔法格の分際で！」

その瞬間――

フレアの剣も赤い光を帯びていく。

「はあああああ!!」

俺の黄金の剣とフレアの赤く輝く剣が衝突し、火花を散らす。
ギンンンン!!

凄まじい金属音を放って、折れた剣の先が宙を舞った。そして、それはフレアの足元に突き刺さる。

同時に、俺の剣はフレアの首筋に突きつけられていた。

「う……嘘よこんな！ 第一等魔法格を持つ私が、第五等魔法格の人間に敗れるなんてあり得ない!!」

今まで真実だと思ってきたことが覆された時の人間の瞳をしている。自信に溢れていた少女は、その場にガクリと膝をつく。

呆然と立ちすくむアランとライザ。

「まさか、そんな……この子を、フレアを圧倒するなど、第一等魔法格の最上位である英雄クラスでもなければ不可能なはずだ!」

「フ、フレア!!」

俺には冷たい女だが、やはり娘への愛は深いのだろう。ライザは呆然とする娘に駆け寄る。彼らは実に人間的だ。その心の中には打算や野心が溢れている。

父親のアランには、表にこそ出さぬものの自分を見下す公爵家への怒りがくすぶっている。

母親のライザには、名誉と地位への渴望。そしてフレアには、己の力で全てを手に入れようと望む野心。

だからこそ俺にとっては都合がいい。

俺は彼らに問いかけた。

「俺と組む気はありませんか?」

その言葉に、三人は何かに魅^み入られたかのように俺を見つめる。

「最強の英雄と呼ばれるあの男を、いずれ俺は倒します。そして全てを手に入れる。俺に呪わしい烙印を押したこの国の、全てをね」

呆然とした顔のフレア。俺が言っていることの意味が分からないといった様子だ。

当然だろう。第一等魔法格の中でも、最も優れた数値を叩き出したあの男を倒せる者などいるはずが無いのだから。

「……この国の全てを手に入れる? あんた、何を言ってるの」

「言葉通りだよ、フレア。俺はこの手に全てを掴む。この国の英雄と呼ばれるあの男を皆の前で打ちのめしてね」

「ば、馬鹿じゃないの? 相手はこの国の英雄よ。第一等魔法格の持ち主の中でも特別な存在の一人よ! 貴方なんか……」

その声は震えていた。確信を持って言い放つ強さは、もはやどこにも感じられない。

「出来ないと思うか? 俺はその為だけにこの十年を費^{つい}やしてきた」

俺の言葉を聞いてフレアの瞳に迷いが生じる。先程の戦いの結果がそうさせるのだろう。

俺はアランに語り掛けた。

「アラン殿、あの男に従って得られるものなど、精々下級貴族の位です。俺という厄介者を抱えた貴方にあの男は強い力など決して与えない。その程度の地位で、娘のフレア共々生涯あの男に飼いつけにされるだけ。ですが俺に従えば違つ。貴方がこれから支払う代償に見合つた地位を、必ず与えたと誓いましょう」

俺の言葉でアランの瞳に一瞬強い野心が浮かんだが、彼は首を横に振つた。

「馬鹿な……そんなことが出来るとは思えない。そもそも、私が約束通り後見人になつたとしても、貴方の士官学校への入学など認められない。士官学校の上層部は、あのお方の息のかつた者ばかりだ。私が後見人として一筆書いたところで、そんな書状など何の力も持ちはないことぐらい、ルオ様もご存知でしょう？」

アランの言つ通りだろう。俺の名で入学希望を出したところで、それが受理されるわけもない。

あの男の耳に入れば、決して許されることが無い話だ。

あいつにとつて恥でしかない俺は、死ぬまでここで日の目を見ない生活を送る運命なのだから。

だが――

「ええ、ですが方法はある」

「それは一体!？」

アランは俺を見つめる。

「簡単なことですよ。入学するのが俺でなければいい」

言っている意味が分からないのだろう。アランは不審げに首を傾げる。

「何を仰っているのです？ ルオ様、それは一体……」

「ルオという男が、この世から消えてしまえばいいと言っているんです」

俺は自分の髪にそつと手で触れる。ブロンドの髪が銀色に変わっていくのが、手にした剣の表面に映つた。

今の俺には、魔法で色素を金から銀に変換することなど、造作も無い。

同時に俺が今まで暮らしていたこの家の別棟から炎が湧き上がり、業火となつて焼き尽くしていった。

「あ、貴方！ 屋敷の離れが!!」

ライザが叫ぶ。

フレアが俺をジツと見つめている。

「ルオ、やったのは貴方ね！ 一体どういうつもり!？」

「生きることに絶望したルオという男は今、世をはかなんで死を選んだ。呪わしい第五等魔法格である自分の存在を、欠片もこの世界に残しなくなつたと遺書を書き残してね。貴方たちは、俺が骨どころか灰まで焼き尽くす魔法薬を部屋にまいて、火をつけたと言えればいい。咎めを受けることなど無い。寧ろ外聞を気にして自ら手を下せなかつたあの男は、俺がこの世から消え去つて喜ぶことでしょつ」

自ら手を下すことも無く、俺が自ら命を絶つ。

あの男の最も望む結末だろう。



「いや、俺のことなどとうに忘れてるか」

あいつにとって俺は、路傍^{ろぼう}に転がる石ころほどの価値も無い。

俺は懷から取り出した銀色の仮面を被る。

同時に、炎が舞い上がる離れの方から、一人の青年がこちらに歩いてくる。年齢は俺と同じ十五

歳、背格好もよく似た銀髪の青年だ。

彼は俺の前に跪^{ひざまずく}と言った。

「ルオ様、全てつつがなく終わりました。あの部屋は、何の痕跡も残さず跡形^{あとがた}も無く燃え落ちるはずです」

「ああ、ジーク。ありがとう、君との約束は必ず果たす」

「はい、信じていますルオ様。ですが、今日からジークは貴方様です。私は今を境^{さかい}に貴方様の忠実な影になりましょう」

彼はこの家の使用人だ。優れた剣士で俺の剣術の相手を務めてくれたが、両親が幼い頃に亡くなり、騎士への夢をあきらめたと言う。

魔法格は第三等魔法格に過ぎないが、頭が良く剣の腕も立つ。

こんなところで埋もれるには惜しい人物だ。

俺が全てを打ち明け、この家で最初に味方につけた相手でもある。

彼には剣術の相手だけではなく、少しずつ研究を進めてきた術式の練習台にもなってもらっていた。劣等魔力の力を最も肌で感じている人物と言えるだろう。

フレアは俺たちを見つめた。そして笑う。

「ふふ、あはは！ おかしい、本気なのねルオ。面白いじゃない、ここまで用意周到に準備をしてたなんて。他の使用人たちにも手を回しているってところかしら」

「ああ、全てではないが、この屋敷に住み込みで働くめぼしい相手には。彼らは皆、俺が死んだと証言するでしょう」

焼け落ちたあの部屋には誰も居なかったが、それを証明するものなど、この屋敷の者たちの証言以外無いのだから。

「道理で静かなはずね。通いの使用人以外はあの火事が起きることも知っていたってわけ」

「そういうことだ」

何も知らない通いの使用人たちも、俺の奇妙な行動を証言するだろう。

壁にわけの分からない文字を書き、食事と剣の修業の時以外はあの部屋を出ることが無い男。自ら命を絶ったとしても何の不思議も無い。

フレアは俺に言う。

「あいつらがあんたを馬鹿にしたのも全部演技だったってわけ、恐ろしい男」

「さあ、どうだかな」

地位や魔法格が低く、一生他人に頭を下げて生きていくことを強いられる者たち。彼らの気持ちが一番よく分かるのは俺だ。

ライザが動揺しながら娘に尋ねる。

「ど、どうということなのですフレア、一体これは……」

「お母様、こいつはジークと入れ替わって士官学校に潜り込むつもりなのよ。そうなんですよ？」
フレアの言葉に俺は頷いた。

「ああ、ジークはあの火事で顔に火傷を負ったことにすればいい、そしてこの仮面はその火傷を隠す為のものということにね。アラン殿、貴方に書いて頂きたいのはジークの名の書類です。必死に屋敷の火を消そうとした使用人への褒美としてね」

「ジークの名で……」

俺はまだ呆然としているアランを見つめた。

「今年の士官学校には、この国の第一王女であるエミリア殿下も入学します。その側近たちも参加して、実戦式戦闘術試験はいつもより派手に行われると聞く。実戦を模して行われる試合の中で彼らを倒して俺が勝利を勝ち取れば、ジークの名は国中に知れ渡ることになる。たかが第三等魔法格に過ぎない男が、士官学校最強の新生としての栄誉を勝ち取る。面白いと思いませんか？」

「本気なのですか？ ルオ様」

「ええ、もちろん」

アランは驚きを隠さずに呟いた。

「エミリア殿下の前で、新入生最強の称号を……まさかそんなことを」

「王女だけではありません。彼女が来るということで見物に訪れる客も多い。俺にとっては好都合です」

静まり返る庭でフレアが笑った。

「貴方がルオという名を捨てて成り上がるために、まず王女の存在を利用しようってわけ？ 確かに、王女の取り巻き連中を倒せば派手な演出になるでしょうね。でも、出来るの？ 連中は手強いわよ」

俺は何も答えずにフレアを見つめる。

「愚問だったわね、連中に躰いているようでは公爵になんて勝てはしないもの……いいわルオ。私は貴方に懸ける。もううんざりなのよ、上級貴族共に大きな顔をされるのはね！」

そんな娘の言葉を聞いてライザが気色ばむ。

「フレア！ 何を言っているのです!!」

「お母様、どうせここでルオと戦っても勝ち目は無いわ。私でさえ手も足も出ないんだもの。でも従ったふりをして公爵に密告なんてごめんよ、私の誇りが許さない！」

美しい赤毛の少女は母親にそう言い放つと、俺の傍に立った。

「ふふ、それに貴方の傍にいれば退屈はしないで済みそうだわ。人生、一度ぐらい命を懸けてみるのも面白いわ」

その隣にアランも進み出る。彼は暫く考えた後に、俺の顔を真つすぐに見た。

「ルオ様、私も貴方に従いましょう。貴方は約束通りフレアに勝利した。騎士の名に懸けて約束を違えることは出来ない。それに貴方は、当主である私さえ知らないうちにこの家を支配している。ただの無謀な愚か者ではない、全てを賭けてみるに値するお方だ」

屈辱にまみれながら俺の面倒を見てきたこの男は、本来は誇り高い騎士だ。一度口にしたことを曲げることは無い。

フレアがライザに尋ねる。

「どうするのお母様？ 残っているのはもうお母様だけよ」

ライザは手を胸の前に合わせて逡巡している。真紅の薔薇の花びらのように赤い唇を噛みしめて押し黙っている。

だが、やがて娘と夫の言葉に覚悟を決めたように、俺に言った。

「……わ、分かりましたわ。その代わり貴方がこの国を手に入れたら、このトレルファス家に上級貴族である伯爵の地位を下さいます！」

大国であるこの国の伯爵ともなれば、小さな国の王にも等しい力を持つ。下級貴族とは段違いの存在だ。

いくら娘のフレアが第一等魔法格を持っているからといっても、騎士爵のこの家がその地位を得ることなど普通ならあり得ない。

俺は首を横に振るとライザに答える。

「伯爵？ 残念ですが、この家を伯爵家になどするつもりはありません」

「どうして？ こちらは命を懸けるのですよ！ そ、それぐらいは当然の要求です！」

ライザは憤ったように声を上げた。

「義母上は欲が無い。俺がこの国の王になれば貴方は育ての母。このトレルファス家は、公爵家に

するつもりですよ。あの男の家に代わってね」

「こ、公爵家!? それに、わ、私が国王の育ての母……」

「そして、ジークたちも皆、魔法格などには関係無く貴族となり、私の側近になってもらいます」

ライザは暫く呆然とした顔でその場に立ち尽くすと、俺の前に膝をついた。

その上気した顔は美しいが、野心の強さが滲み出ている。

彼女にとって二度とめぐっては来ない機会だ。命を懸けるに値する対価があると結論を出したのだらう。

「し、従いますわ。このライザ、喜んでルオ様に全てを捧げます!」

俺は頷くと答えた。

「その言葉、確かに聞きました。裏切りは許しませんよ」

「は、はい! ルオ様、今日からライザはルオ様の忠実なるしもべ! なんなりとお申し付けくださいませ」

フレアはそんな母親の姿に苦笑しながら俺に言った。

「決まりね、ルオ。いいえジーク、私たちは貴方に全てを懸けるわ。でも、エミリア王女の傍に仕える三人の側近は手強いわよ。貴方のことだもの、知っているでしょう? 中でも一人、とんでもない男がいることを」

2、氷の刃

トレルファス家での火事騒ぎから一か月。

長らく忘れ去られていた少年の死は、大国アルディエントの貴族の中で一時的には話題になったが、すぐに皆の関心は薄れていった。

十年も前に表舞台から去った一人の少年のことなど、取るに足りない話である。

それよりも妙な噂話に興じて、この国最高の英雄であるファルーディア公爵の不興^{ふきよう}を買うのを誰もが恐れたのだ。

そんな中、アルディエントの都は別の事柄で盛り上がりを見せていた。年に一度の催しが行われているからだ。

誉れあるアルディエント士官学校における最強の新生生を決めるイベント、実戦式戦闘術試験。

開催地は、都の中でもひととき目を引く巨大な闘技場。

「はああああ! 喰らいなさい!!」

闘技場の中央で華麗に舞う赤い髪の少女。その凄まじい剣技に、相手の男は手にしていた剣を弾き飛ばされた。喉元に少女の剣が突きつけられる。

「勝負あったわね」

「くっ！ ま、参った!!」

膝をついて負けを認める青年。

審判を務める士官学校の教師は、試合終了と手を挙げた。

「そこまで！ 勝者、フレア・トレルファス！」

それを聞いて少女はくると踵を返すと、闘技場の舞台を下りる。

歴史を感じさせる石造りの円形闘技場。その中心に作られた戦いの舞台を見下ろすように、周囲には多くの人々を収容出来る観客席が作られている。

勝気で美しい少女の戦いぶりに、闘技場は大歓声に包まれた。

「『うおおおおお!!』」

「何という強さだ！ あの技のキレ、そして身のこなし」

「それに何とも可憐だ！」

「ああ、しかしトレルファスと言えば……例の無能者を引き受けたあのトレルファスの娘か？」

「くく、父親に似ず堂々としたものよ」

歓声の中で、上位貴族たちの為に作られた貴賓席ではそんな囁きも漏れる。

その貴賓席の中央。輝くようなブロンドの髪に、白銀のティアラを付けた少女が座っている。

まるで天から舞い降りた女神のような美しさをもつ彼女こそ、アルディエントの秘宝と呼ばれる

第一王女、エミリアである。

だが、その表情は浮かない。

隣に座る貴公子がエミリアに声をかけた。

「エミリア殿下、またあの男のことを考えておられるのですか？」

「え？ いえ……レオニード、そんなことは」

そう口にしながらも、エミリアの脳裏には一人の少年の面影が浮かんでいた。

（もし、あの方が生きていたら私と同じ十五歳。だけど……）

滲む涙をそっと拭くエミリア。

幼い頃、一度婚約者となった公爵家の少年。初めは恥ずかしくてどんな話をすればいいのか分からなかったが、彼は驚くほど博学で、幼いエミリアが王宮の作法を上手く出来ずに涙ぐんでいた時も、いつも手助けをしてくれた。

優しいその笑顔がエミリアの脳裏に焼き付いて離れない。

（ルオ様、本当に亡くなってしまわれたの？）

美しい第一王女の秘められた初恋。その悲しみから、思わず言葉が口について出る。

「レオニード。魔法格で人生が決まってしまうなんておかしいとは思いませんか？ ……あのお方

の笑顔は、優しさは、魔法格などとは関係がなかった」

その言葉に一瞬、周囲が凍り付く。魔法格が絶対の価値を決めるこの国の王女が、口にして良い言葉ではないからだ。

レオニードと呼ばれた青年は、王女をいさめるように声をかけた。

「エミリア様、そのようなことを二度と仰ってはなりません。第一等魔法格を持つ我らが、愚かな

民たちを教え導かねば、国は滅びるのです」

「……」

レオニードは今年の新人生の中でもずば抜けた才能を持つ男。王家の血を引くロイファルト公爵家の嫡男^{ちちぞなん}で、エミリアの側近でもある。

そして、将来はこの国の英雄に名を連ね^{つづ}ると言われているほどの人物だ。

（そうですね、私は何を偉そうなことを。私もあのお方を見捨てた人間の一人なのに）

エミリアはルオのもとへ向かおうと、全てを捨てるつもりで何度も王宮を抜け出そうとしたが、王女の身でそれは叶わず、すぐに連れ戻された。

それだけに、ルオの死を知った時は心が引き裂かれたのを思い出す。

レオニードは美しい王女の涙を指で拭いた。

「エミリア様、あんな下らない男のことなど、私が忘れさせて差し上げます。今はこの私が貴方様の婚約者なのでから」

「はい……レオニード」

俯^{うつむ}く王女。そんな中、次の試合の準備が整う。

戦いの舞台に上がったうちの一人は、立派な服に身を包んだ魔導士風の青年。

そして、反対側から舞台上がろうとしているのは、銀色の仮面を被った男だ。それを見て会場がざわめく。

「おい、あの仮面は一体？」

「ああ、例のトレルファス家の使用人らしいぞ。何でも火事^{やけど}で火傷を負って顔を隠しているとか」

「しかも第三等魔法格だとの噂だぞ」

貴賓席の貴族たちは笑う。

「くく、どうしてそんな場違いなクスが？ そんな者を出せばトレルファス家はいい笑いものだ」
「ふふ、運良く娘の対戦者にでもなれば、咬^かませ犬ぐらいにはなると思ったのか。名目上この試合には、どんな魔法格の者も出場出来ることになっている。普通は恥になることを恐れて、出場などしないがな」

「特に、今年はエミリア様を迎えて盛大に行われている。第三等魔法格で使用人ごときが出場を望むなどと。くはは！ そんな愚^{おろ}かなものだ」

エミリアも仮面の青年を見つめた。

（第三等魔法格で、実戦式戦闘術試験に参加を？）

隣のレオニードはエミリアに言う。

「愚かな。エミリア様、あの男の相手はウェイン。第一等魔法格を持ち、エミリア様に仕える側近の一人。ご覧になるといい、魔法格に恵まれた者とそうでない者の違いを。そうすれば、貴方の迷いも断ち切れると言うもの」

「レオニード……」

エミリアは両手を胸の前に合わせて戦いの舞台を見つめる。そして、一つの賭けをした。

（もしも、あの仮面の青年が勝つことがあれば、私は変わりたい。あのお方を見捨ててしまった自

分を捨てて。ああ……あり得ないと分かっている賭けをするなど、私は愚かで卑怯な女です）
そんな中、舞台上に上っていく仮面の青年に、先程試合を終えたばかりの美しい赤毛の少女が声をかける。

「ジーク、相手は王女殿下の側近の一人よ。いけすかない上級伯爵の息子。だけど私よりも魔力は上。勝てるんでしょうね？」

「さあ、やってみなくては何とも。フレアお嬢様はそこでお待ちを」

お嬢様と呼ばれて苦笑するフレア。仮面の男は自分の存在に観衆が戸惑う中、舞台の中央に歩いていく。

一部の観客は大声で囁し立てる。

「馬鹿な奴だ、ほんとにやるつもりだぜ」

「赤っ恥をかくだけなのによ」

先に舞台の中央に立つ、上級伯爵家の息子であるウェイン。

試合開始を告げる審判の声がかかると、ウェインは目の前にいる仮面の男を見て嘲笑う。

「下らんな、こんな試合。棄権しろ。貴様のようなクズを相手にすること自体が、この俺の恥になる」

「お断ります。それに貴方では私に勝てない」

一瞬、目の前の男が何を言ったのか分からずに、啞然とするウェイン。

そしてその目はすぐに怒りに燃え上がっていく。

「貴様……今何と言った。死にたいのか？」

ウェインの言葉に、仮面の男は剣を構えることもせず、今度はぶっきらぼうに答えた。

「うるさい男だ。さっさとかかってこい」

「き、貴様ああああ!!」

ウェインの体から湧き上がる凄まじい魔力。それが右手に凝縮し、巨大な炎の鳥を作り上げていく。

「ぐく、ははは！ 愚か者が、見ろこの俺のフレイムフェニックスを！ 貴様が俺を怒らせたのだ、死ね!!」

本来ならば、相手の命まではとることが許されない戦いだ。だが、第三等魔法格の使用人が死んだところで、試合中に起きた事故として片付けられるだろう。

しかし、その巨大な火の鳥が羽ばたくことはなかった。

「ぐっ！ ぐおおおお!!」

右腕を押さえて膝をつくウェイン。その手の甲には、鋭い氷の刃が突き刺さっている。

同時に炎が消え去っていくのを観客は見た。

「馬鹿な！ そんな馬鹿な!!」

魔力で活性化したウェインの視力が捉えるよりも遙かに速く放たれた、氷の刃。そして、仮面の男は剣を片手に彼を見下ろしていた。

いつ動き、そしていつ剣を腰から抜いたのだろうか？

神技とも呼べるその動き。

剣の切っ先は、ウェインの喉元に突きつけられている。

「どうした、もう終わりか？　ここが戦場ならお前はとくに死んでいる」

静まり返る闘技場。

第一等魔法格を持つ高貴な血筋の者が、たかが第三等魔法格の使用人に打ちのめされる光景。あり得ない状況に皆、息をのむ。

「どうしたんです？　判定をしてもらいましょうか」

仮面の男は丁寧な口調に戻り、静かにそう言った。

その言葉でハッと我に返った審判員は、まだ呆然としながらも判定を下す。

「しょ、勝者！　ジーク・ロゼファルス!!」

それを聞いて、仮面の男は踵を返すと、何事もなかったかのように歩き始める。

観客はまだ静まり返っている。エミリアは、舞台の端に向かう青年を見つめて小さく声を上げた。

「勝ったわ、彼の勝ちよ」

王女のその言葉をきっかけに、貴賓席の貴族たちからも声が漏れる。

「ば、馬鹿な。一体何が起きたのだ？」

「あ、あり得ぬ！」

「見たであろう？　ウェインのフレイムフェニックスに込められた魔力を！　あ、あの仮面の小僧からは僅かな魔力しか感じなかったぞ!」

そんな中、立ち上がる一人の貴族の姿があった。
ギルスフェルト上級伯爵。ウェインの父親である。
「愚か者め！　咬ませ犬ごときに油断しおって！　あの程度の氷の刃しか作り出せぬ小僧に不覚をとるとは!!」
その言葉に、周囲の貴族たちは同調する。
「そ、そうですな」
「そうだとしか思えませぬ。魔力の量が全く違う。余程こ子息は油断されておられたのでしょう」
「無理もない。あのようなクズが相手では」
それを聞いて、貴賓席の周囲にいる観客たちからもさざ波のように声が漏れ広がった。
「た、確かに」
「そうでなければ、第一等魔法格を持つお方が負けるはずが無い」
「ああ」
怒りは冷めやらぬ様子だが、周囲の反応にようやく面目を保ったとばかりにギルスフェルト上級伯爵は席に腰を下ろす。
レオニードは黙ってそれを眺めている。
（愚かな。今のが油断や偶然に見えたのか？　あの男の魔力は、ほんの僅かな瞬間だがウェインを遥かに上回るほどに高まった。それを見抜けぬとは）
そして、レオニードの瞳は、舞台の上で起き上がるウェインの姿を捉えた。

同時に獅子のような咆哮がレオニードの口から放たれる。

「愚か者が！ 恥の上塗りをするつもりか!!」

よろよると立ち上がったウェインの左手では、魔力が炎となり凝縮されていく。殺意に満ちたその瞳は、ジークの背中を凝視している。

「……待て、貴様。どこに行く、まだ勝負は終わってはいないぞ！」

「ウエ、ウェイン様！」

審判が制止しようとするが、それをねのけるウェイン。

「邪魔だ、どいていろ!!」

同時に、彼の左手に生じたフレイムフェニックス。それは大きく翼を広げて羽ばたくと、ジークに向かっていく。

我を忘れたかのように、笑い声を上げるウェイン。

「くく、くはは!! 貴様だけは殺す！ 燃え尽きて死ねええい!!」

だが、観客は見た。事も無げに振り返り、指先をウェインに向けたジークと、そして彼が放った何かを。

強く魔力を込めたようには思えないそれは、不死鳥を消し去り、ウェインの頬を掠める。

そしてドリルのように回転する氷の刃は、数本の柱を撃ち抜いて、その奥にある壁に突き刺さる。とようやく止まった。

「ひっ！ ひいいい!!」

頬から血を流し、戦いの舞台に尻もちをつくウェインの姿。

ジークはそれを見て静かに言った。

「死ぬぞ。次は外すつもりは無い」

再び静まり返る闘技場。

仮面の奥に見える瞳に射抜かれて、ウェインは怯えた。

（何なのだ……一体こいつは何なのだ!?）

第一等魔法格を持ち、生まれつきエリートである上級伯爵家の息子。それが、第三等魔法格に過ぎない男に気圧されている。

卑怯にも後ろから魔法を放った男に、仮面の青年は尋ねる。

「どうした、もう一度やってみるか？ だが、今度は俺の刃がお前の心臓を貫くことになる」

「ひっ！ ひいいい!!」

逃げるようにジークに背を向けるウェイン。惨めなその姿は、王女の側近の一人としてあるまじきものだ。

レオニードは吐き捨てる。

「どこまで恥を晒すのだ、愚か者め！」

その隣で、エミリアはウェインを破った仮面の青年を見つめている。

「あのウェインに勝つなんて。ジーク・ロゼファルス、一体彼は……」

その先は言葉にせず、彼女は胸中で続ける。

(どうしたのかしら私。一瞬、懐かしいような不思議な気配を感じた気がした)
そんな中、再びギルスフェルト上級伯爵が立ち上がると叫んだ。

「ば、馬鹿な、こんなことがあるはずが無い！ あの男は何者だ！ 第三等魔法格のほずがあるまい、本人かどうか改めさせよ!!」

血走った目でそう叫ぶ彼を、貴賓席に同席する士官学校の関係者がなだめる。

「そ、そんなはずはございません！ 不正がなされぬよう、試合前には必ず魔法紋の確認をしております。魔法紋は指紋のごとく一人一人固有のもの。五歳のおりに、皆が魔法格試験にて検査され、登録されるものでございますゆえ、あの男はジーク・ロゼファルスに間違いございませんぬ！」

それを聞いてギルスフェルト上級伯爵は、更に怒りを爆発させる。

「お、おのれ……第三等魔法格しか持たぬ騎士爵家の使用人ごときに、尊き上級伯爵家の血を受け継ぐ我が息子が!!」

レオニードは静かに考え込む。

(第三等魔法格だと？ 一瞬高まった奴の魔力はそんなものではない。ジーク・ロゼファルス、奴は何者だ)

舞台の上で、再び審判が戦いの勝者の名を高々と告げる。

「勝負あり！ しょ、勝者、ジーク・ロゼファルス!!」

そして、踵を返し、戦いの舞台を後にするジークの雄姿。

静まり返っていた観客たちから、割れんばかりの歓声が上がる。

「す、凄い！」

「何て強さだ……ほ、本当にあれで第三等魔法格なのか!？」

「た、確かにそれほど強い魔力は感じなかった。一体どうやったのだ？」

「信じられん！」

「『うおおおお』」

闘技場を揺るがす大歓声の中、舞台を下りたジークを待つのは赤毛の美しい少女だ。

「派手にやったわね、ジーク」

「ええ、待つておられるフレアお嬢様に恥をかかせるわけにはいかないので」

「まったく、よく言うわ」

フレアはそう言って笑顔を見せると、騒然とする観客席を眺めながらジークに囁く。

「まさか、貴方が他人の魔法紋を真似ることが出来るなんて、連中も思わないでしょうね」

「ジークの魔法紋は細部まで正確に数式化している。いつでも再現可能だ」

肩をすくめるフレア。

「本当に恐ろしい男。でも、問題はウェインなんかじゃない。ふふ、気が付いてるでしょ？ こちらを見てるわよジーク」

「ああ、奴の視線は試合中から感じていた」

フレアはその視線の主を見つめながら、背筋に冷たいものを感じる。

「レオニード・ロイファルト。エミリア王女の婚約者よ。本来は貴方の席だった場所を奪った男と

言えるかもしれないわね」

ジークは貴賓席を眺める。

美しい王女の隣には、その肩を抱いてジークを眺めている一人の貴公子の姿があった。

フレアは言った。

「あの男は別格なもの。第一等魔法格、その最上位である英雄クラスの力を持つ者の一人。気を付けるのね、ジーク。貴方でも簡単に勝てる相手じゃないわ」

「レオニード・ロイファルトか。あの男と同じ英雄クラスの力を持つ存在」

「ええ、血筋も力も申し分無いわ。いずれはこの国の英雄に名を連ねることになるでしょうね」

フレアはそう言いながら、闘技場の壁面に魔法で描き出されたトーナメント表を眺めた。

ウェインとジークの試合で一回戦は全て終わっている。

「あの男は一回戦はシードで不参加だったけど、次からは出てくるわ。少し休憩が入った後の二回戦、その第一試合にね」

「ああ、そのようだな」

今年の新人生の内、実戦式戦闘術試験への参加希望者は十五名。ジークを除けば、その全てが第一等魔法格か第二等魔法格の持ち主だ。

一回戦で七名が消え、シードとなっていたレオニードを含めて、二回戦に進むのは八名の生徒である。

フレアが肩をすくめる。

「私があの子に当たるとしたら、三回戦にあたる準決勝。ジーク、貴方は決勝ね」

その言葉にジークは頷く。

「順調にいけばな、フレア」

会場からはウェインが運び出されていく。

係員にしがみついて正気を失ったように叫ぶウェイン。

「ひっ！ ひい、あいつは化け物だ！ 助けてくれ、殺される!!」

その怯えた表情を見てフレアが笑った。

「情けない男。第一等魔法格を持っても、あれじゃあ使い物にならないわね」

「ああ、確かに魔力だけを見ればお前よりも上だが、全体的な力を見ればフレア、お前の方が奴よりも遥かに上だ」

それを聞いてフレアが再度肩をすくめる。

「な、何よ。お世辞を言っても何も出ないわよ」

「本当の話だ。剣を振るう時の瞳、そこに浮かぶ覚悟が違う。俺はお前のその目が好きだ。だから仲間を選んだ」

「な！ ば、馬鹿じゃないの！ す、好きとか……」

赤毛の美少女は思わず赤面して、仮面の男を睨む。

ジークは軽いため息をつくと言え。

「おい、勘違いするなよ。野心に満ちたお前の目が好きだと言ってるだけだからな？」

「は？ か、勘違いって何よ？ 私がいつ勘違いしたのよ！」

「やれやれだな。行きましようか、フレアお嬢様」

フレアの目の前をすたすたと歩いていくジーク。

「待ちなさいよ、ジーク！ 勘違いってどういう意味よ、調子に乗らないでよね！」

ジークを追いかけるフレア。戦いの舞台を離れ、観客席にほど近い場所にやってくると、上から大歓声が二人に降り注ぐ。

「凄かったぞジーク！」

「恰好良かったわ!!」

「それにそっちの赤毛のお嬢ちゃんも凄かったぜ！」

「ああ、素晴らしい剣技だった！」

「一回戦でこれほどとは。今年の新入生はレベルが高いな」

それを聞いてフレアは少し機嫌を直したのか、ツンとした顔で言う。

「当然よ。甘やかされて育ったお坊ちゃまとは違うわ」

観客席に手を振るフレア。可憐なその姿に、観客はますます盛り上がっていく。

「まったく。行きますよ、お嬢様」

ジークがそう言ってフレアを控室に促そうとしたその時。

控室に向かう広い通路にいた大会の関係者たちが、一斉に誰かに道を空けるのが見える。そちらに向かおうとしていたジークやフレアと、その誰かは自然に相対する形になった。

「エミリア王女……それにレオニード」

思わず呟くフレア。

レオニードは二回戦の第一試合の為に、こちらに降りてきたのだろう。王女を護衛する為の兵士たちの姿も見える。

「ああ、貴方がジーク・ロゼファルスですね！ 素晴らしい試合でした！」

エミリアはジークの姿を見ると、笑みを浮かべて駆け寄った。

「ひ、姫！」

突然のことに、周囲の兵士たちは声を上げる。

その声に気を取られたのか、振り返るとドレスの裾をひっかけてつまづく王女。

「きゃ!!」

思わず目を瞑ったエミリアの体を、何者かが優しく抱いていた。

いつの間にこの距離を移動したのか、そう思わせるほどの速さ。エミリアは自分の体を抱き留めている男の顔を見た。

「あ、あの……」

銀色の仮面を被ったその男を見つめて、エミリアは古い記憶を思い出した。

(どうして……この感覚はやっぱり)

幼い頃、蝶々を追いかけて庭を走り回っていた時、転んで泣いているところを抱き上げてくれた少年がいた。

その時と同じ感覚。

「ジーク・ロゼファルス、貴方は一体……」

エミリアはジークの仮面、そしてその奥にある素顔に、強い関心を掻き立てられた。

だが、彼女はすぐにレオニードの腕に抱き寄せられる。いずれこの国の英雄に名を連ねるであろうその男は、静かに口を開いた。

「礼を言おう。だが、覚えておくことだ。このお方はお前が触れて良い相手ではない」

「これは出過ぎた真似を。失礼いたしました」

ジークはそう言って二人に頭を下げると、その場を立ち去ろうとする。

レオニードはその背に向かって言った。

「どこへ行く？ せっかくだ、見ていくといい。お前が先程やったことなど、大したことではないと教えてやろう」

その言葉に振り返るジーク。

銀色の仮面が、静かにレオニードを眺めている。

「分かりました。拝見しましょう」

対峙する二人を見て、エミリアは不安げに声を上げる。

「レオニード、何もそんな……」

「エミリア様、この男にはつきりと教えておく必要がある」

レオニードはジークに冷たく言い放つ。

「我らとお前は、違う世界にいる人間なんだということを。二度と王女殿下に触れようなどとは考えぬように、身の程を思い知らせてやろう」

新人生最強との呼び声が高い貴公子は、そう口にするると戦いの舞台に向かう。そこには一回戦を終え、同じく二回戦の第一試合に臨むべく姿を見せた対戦者の姿があった。

彼もまた、第一等魔法格を持つ魔導剣士だ。

魔法で牽制^{けんせい}をしつつ接近戦でも優れた戦いぶりを見せる。ある意味、そのファイトスタイルはジークに似ていると言えるだろう。

その魔導剣士は、不敵な笑みを浮かべてレオニードに言った。

「英雄クラスの力を持つと噂だが、俺もあんたに勝つために修練を重ねてきた。他の雑魚^{ざご}には興味が無い」

「そうか、ご苦勞なことだ」

眉一つ動かさずそう答えるレオニード。審判はその魔導剣士から放たれる魔力に、額から一筋の汗を流す。

（今年の新人生は何だ……レオニード様だけではない、先程のジークという男といい、この男といい。例年よりも遥かにレベルが高い。一回戦もこの男の審判を務めたが、口先だけではない。気を抜けばレオニード様も危ないぞ）

額の汗を拭いて、審判は試合開始を告げる。

「そ、それでは二回戦第一試合始め！」

警戒するように一度距離を取る魔導剣士。レオニードは魔力を高めるでもなく、ただ舞台の中央に立っている。

ギリッと歯を噛みしめる対戦者の男。

「舐めてるのか？ 後悔するぞ！ 本当に最強と呼ばれるべき新人生が誰なのか、教えてやる!!」

右手に強力な魔力を込めるその男は、そのまま右手をレオニードに向かって突き出す。

「はああああ！ フェンリルブリザード!!」

氷で出来た巨大な青い狼が凄まじい勢いで地面を駆ける。

観客席からどよめきが起きた。

「何だあの狼は！」

「凄い力だ!!」

恐るべき速さでレオニードの左側に回り込み、凍て付く息を吐きながらその喉笛を狙う青き狼。

同時に、それを放った男の体もその場から掻き消えている。

「おおおおお!!」

狼とは逆方向から襲い掛かる、魔導剣士の鋭い突き。

レオニードからはまだ露ほどの魔力も感じられない。

（馬鹿め。あのウエインもそうだが、王女の側近などと言っても所詮はこの程度か。英雄クラスが聞いて呆れる！）

男は勝利を確信して笑う。

「勝ったぞ！ あのレオニードに!!」

だが――

レオニードに襲い掛かったはずの青い狼は、もう消え去っていた。

そして、レオニードの喉元に突きつけられるはずの男の剣は砕け散っている。

それだけではない。その魔導剣士の額にはレオニードの指先が軽く押しあてられていた。

いずれ英雄になると言われている男は、静かに対戦者に問う。

「どうする？ 死にたいならまだ続けるがいい」

「な……馬鹿な、そんな馬鹿な」

男はうわごとのようにそう呟いた。観客もあまりのことに静まり返っている。

そして、観客の一人があることに気が付いて声を上げた。

「お、おい、あれを見ろ!!」

その観客が指さした先には、氷の刃に貫かれた闘技場の柱がある。

違う観客も言う。

「あ、あっちにもあるぞ！」

そして、逆方向にも。

「なあ、あれってさつきジークがやった技じゃないのか？」

「嘘だろ見えなかったぞ！ そ、それも二つも同時に!？」

「そんな、魔力なんて感じなかったぞ？」